

プログラム・ノート

鄭 理耀

ベートーヴェン：「アデライーデ」作品46

この歌曲は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の若かりし日の傑作として知られる。故郷ボンから音楽の都ウィーンに移り住み、ピアニストとして活躍していた20代中頃に書かれた。素朴で美しい自然の中に、憧れの女性アデライーデの姿を投影する恋心が歌われており、ピアノ伴奏部にはところどころにその情景描写が見られる。詩と音楽とを密接に関連づけるこの作曲法は、当時は斬新なものであった。

シューベルト：

「歌曲王」と称されるフランツ・シューベルト(1797～1828)は、その呼び名の通り、短い生涯のうちに600を超える歌曲を作った。彼の歌曲創作の基盤となっていたのは、歌いやすさや親しみやすさ。誰もが容易に歌えて楽しめるものであるべきという考えが根底にあったようだ。「月に寄す」D. 259は1815年に作曲された、ゲーテの詩による有節歌曲(第1節につけられた旋律をそのまま繰り返す歌曲)。きわめてシンプルな音楽が、詩の内的な世界観をぐっと際立たせる。友人のショーバーの詩に作曲した「音楽に寄す」D. 547は、1817年に書かれた有節歌曲。音楽への尊い愛が、簡素ながらも美しい和声にのって歌い上げられる。同年に作曲された「ガニュメート」D. 544は、ゲーテの詩に基づく通作歌曲(詩の各節に異なる旋律をつける歌曲)。ガニュメートとは、ギリシャ神話で神々の侍童役となった美少年ガニュメデスのこと。鷲に変身したゼウスに連れられて憧れの天上へと向かう場面が、多様な音楽語法によって描かれる。

シューベルトの晩年の創作意欲は凄まじいもので、大作が次々と生まれている。2つの即興曲集(D. 899とD. 935)も、死の前年である1827年に書かれた。「即興曲」と題されてはいるものの、全体を通してみるとソナタのような大規模な作品集に仕上がっており、シューベルトの熟達した作曲技巧が随所に見られる。4つの即興曲 D. 899 より 第3曲は、アンダンテ、変ト長調、2分の4拍子。上声部にはシューベルトが得意とする歌のような旋律が響き、中声部の分散和音的音型がそれを豊かに彩る。

「ミューズの子」D. 764は、1822年に作曲されたゲーテの詩による変奏有節歌曲。その頃シューベルトは梅毒に感染し苦しんでいたが、それを全く感じさせない陽気

で快活な作品である。1821年に作曲された「憧れ」D. 636は、シラーの詩に基づく通作歌曲。これは、1813年に書かれたD. 52の改作となる。第1作D. 52ではオペラのような劇的な音楽展開がなされるが、この第2作はより調和のとれた構造の中で主人公の切なる想いを表現している。

1816年から17年にかけて、シューベルトは多数のヴァイオリン独奏曲を手がける。ヴァイオリン・ソナタ(ソナティーナ)第2番 イ短調 D. 385も、この時期に生まれた3つのソナタのうちの一つである。友人たちと演奏するために書かれたとされるこのソナタ集は、小規模であることから、シューベルトの死後に「ソナティーナ(ソナチネ)」として出版された。第2番 第2楽章は、アンダンテ、ヘ長調、4分の3拍子。清楚で気品のある緩徐楽章である。なお、シューベルト自身もヴァイオリンを得意としていた。

前半最後にお聴き頂くのは、1822～23年頃に作曲されたコリンの詩による2つの歌曲。「小人」D. 771では、ピアノ伴奏のトレモロが詩の不気味な雰囲気を盛り上げ、「夜と夢」D. 827では、甘美で柔軟な旋律が静かに清らかに歌われる。

シュポーア:6つのドイツ語の歌曲 作品154

ルイ・シュポーア(1784～1859)は、著名なヴァイオリニスト、指揮者であり、多作な作曲家でもある。様々なジャンルの作品を残したが、最も注力していたのは、やはりヴァイオリン曲であった。この作品は、リッペ侯レオポルト3世の依願によって書かれた、ヴァイオリンとピアノの伴奏を持つ歌曲集で、シュポーアの晩年期を代表する一曲である。各曲には異なる詩人の詩が選ばれており、名人芸の盛り込まれたヴァイオリンのオブリガートが全曲を通してとても美しい。第1曲(詩:マーン)ではヴァイオリンによるナイチンゲールの鳴き声が曲全体に心地よく響き渡り、第2曲(詩:F. シュポーア)では狩りを楽しむ様子が明朗に描かれる。第3曲(詩:オットー)では、各楽器の対話とヴァイオリンの技巧的パッセージが印象的である。第4曲(詩:ゲーテ)では魔王が少年を誘惑するシーンが不気味なほど美しく、第5曲(詩:ホツツェ)では苦悩からの解放がドラマチックに表現される。第6曲(詩:コッホ)はこの作品で唯一の完全な有節形式で、静かに穏やかに曲を閉じる。

クララ・シューマン:『音楽の夜会』作品6 より 第2曲「ノットゥルノ」

この作品は、クララ・シューマン(1819～96)が10代半ばで作曲した、ロマン的心情の溢れる性格小品である。全6曲からなり、しばしばロベルト・シューマン(1810～56)やフレデリック・ショパン(1810～49)、フェリックス・メンデルスゾーン(1809～

47)の作品との類似性が指摘される。彼らと直接関わりを持ち、当時のロマン派音楽の風潮を理解していたクララは、その作風を自然と自らの作品に取り入れることができたのだろう。第2曲「ノットウルノ」は、まさにショパンのノクターンからの影響を随所に感じることのできる典雅な作品である。

ロベルト・シューマン：

シューマンにとって1840年は、クララとの結婚が実った年であり、「歌曲の年」でもある。彼の創作意欲はピアノ曲ではなく歌曲へと向かい、独創的な名作を続々と作曲した。この上なく洗練されたピアノ伴奏を持つシューマンの歌曲は、その分野の新たな扉を開いた。この時期に生まれた『リーダークライス』作品24は、ハイネの『歌の本』の詩による全9曲の歌曲集。第5曲「僕の苦悩の美しい揺りかご」では、ゆりかごの動きを模したピアノ伴奏にのせて、失恋の苦悩が未練がましく歌い上げられる。『ミルテの花』作品25もこの年に書かれた全26曲からなる歌曲集。ミルテの花は純潔の象徴であり、この作品は結婚式の前日に花嫁クララに捧げられた。冒頭を飾る第1曲「献呈」は、リュッケルトの詩によるもので、ひたむきな愛と喜びに満ち溢れた朗らかな曲である。

ヴァイオリンとピアノのための3つのロマンス 作品94は、ドレスデンで精力的に創作活動を行なっていた1849年の作品である。前年に起こった3月革命が、シューマンの創造力に刺激を与えたとされる。この作品は、クララへのクリスマス・プレゼントとして12月に作曲された。もともとはオーボエとピアノのために書かれたが、オーボエ・パートは他の楽器で演奏されることも多い。第2曲「素朴に、心から」は、晴れやかで温かな旋律に始まる冒頭部分と、嵐のような激的な中間部を持つ三部形式で書かれている。

『12の詩』作品35は、「歌曲の年」の最後に完成された、ケルナーの詩による歌曲集。第10曲「ひそやかな涙」では、巧みな転調によって心の動きが穏やかに表現される。『6つの詩とレクイエム』作品90は、1850年に作曲された後期シューマンの傑作の一つ。レーナウの6つの詩による非常に繊細で絶望感漂う作品である。作曲当時、レーナウが既に亡くなっていると思いこんでいたシューマンは、彼への追悼として、終曲に古いカトリックの歌に基づく第7曲「レクイエム」を付け加えたのだが、作品の完成から20日後に初演が行われた際、レーナウは実は数日前に亡くなったばかりであるという真の訃報が届き、シューマンは仰天したのだった。